

神奈川産学チャレンジプログラム

一般社団法人神奈川経済同友会事務局長

金子 好隆

一般社団法人神奈川経済同友会は、学生の職業や労働に対する意識と企業の求める人材とのギャップやミスマッチの解消を目的として、「神奈川産学チャレンジプログラム」を実施している。取組み開始から今年度で11回目を数える同プログラムの狙い、運営面での課題や今後の展望について紹介する。

1 プログラムの内容と狙い

「神奈川産学チャレンジプログラム」は、学生の人材育成を目的に、一般社団法人神奈川経済同友会（以下、同友会）の会員が所属する企業・団体と県内大学とが協働して運営している課題解決型研究コンペである。

具体的には、PBL（課題解決型学習）の手法を応用し、企業が抱える経営課題の中から実践的な研究テーマを挙げ、それに対して学生チームが研究し実践的で実効性のある解決策を研究レポートとして提出するものである。大学生に実社会の問題に具体的に取り組ませることを通じ、問題解決能力の高い人材を育成することをねらいとする。

2 社会との接点の提供

本プログラムは、学生にとって社会との接点を持ち、生きたビジネスの世界を知る好機となっている。

PBLを基本とする本プログラムは、インターンシップのように企業の現場を訪問し日常業務を体験できる内容にはなっていない。しかし、企業からの研究テーマに関する詳細な説明や、研究レ

ポート作成における企業側のフォローといった場において、さまざまな人的交流がなされている。このことで、学生と企業との距離感は縮まり、学生自身、物事の考え方や見方など企業から学ぶことができ、とてもよい刺激となっている。

また、研究テーマそのものについても、企業によっては研究視点としてフィージビリティスタディの検証を要望している。そうした視点に立脚して研究成果を出し、企業人から評価を受ける、その過程において学生はビジネスの仕組みの一端を知ることができるのである。

3 運営上の課題

課題は三つある。一点目は学生らしい斬新なアイデアが次第に少なくなっている点である。参加大学の大半が研究室単位で取り組んでおり、提出された研究レポートも研究室で学んでいる理論や手法を活用したものが目立ってきている。その結果、レポートの水準は年々向上しているが、同時に学生らしい斬新なアイデアを提示するレポートは少なくなっているように感じる。企業からすれば、そうした理論や手法はともかく、企業内で得られない学生らしい斬新なアイデアを期待してい

と思われる。企業人の思いもよらない提案を期待したい。

二点目は研究テーマの絞り込みの程度である。プログラム実施後の学生のアンケートでは、「テーマが漠然としていて取り組みにくかった」との意見もある一方で、「漠然としていたので、問題点の絞り込みの過程でさまざまな角度から研究できてよかった」との意見もあり、どこまで絞り込んだテーマにするか難しいと感じた。今後もテーマの最適な絞り込みの程度を模索していきたい。

また、大学からの意見として、サービス業のテーマ設定が多く、もう少し製造業の研究テーマが欲しい、という意見もある。会員のビジネスの大半がサービス業という事情はあるが、本プログラムの更なる拡大のためには、より幅広い業種のテーマを募り、参加する大学の要望にこたえていきたい。

三点目は大学との連携である。我々ビジネスに携わるものにとっては大学と連携する機会はそのほど多くなく、また学生の指導に当たる先生方自身も、ビジネス社会との直接的な接触の機会は多くないはずであり、本プログラムは、学生諸君ばかりでなく、企業の皆様にも、先生方にとってもよい機会ではないかと思う。今後さらに大学との連携を深め、協力関係を強固なものとしたい。



表彰式の様子

(写真提供: 神奈川新聞社)

4 今後の展望

本プログラムが、県内大学の学生の問題解決能力、社会人力の向上、ひいては会員企業の興味・関心へとつながって、就職にまで結び付くことができれば、経済界として大変喜ばしい。

そのためにもさまざまな業種から参加企業を募り、研究テーマの幅を広げることで、参加大学の拡大を図りたい。

学生に課題の設定から始まる真の意味での課題解決能力を身につけさせるためには、学生自らが企業を訪問し課題を見つけ出し、研究テーマとして取り組むのが理想である。本プログラムでは、そこまでは難しく、企業が課題を設定している。

しかし、先ほども述べたように、チームによっては、設定された課題を検討する過程でさまざまな側面からアプローチを試みることで、彼らなりの解決策を見つけ出している。課題の解決に向けたアプローチは学生に任されているため、その取り組みに対する姿勢によっては、真の意味での課題解決に近づくことができる。学生諸君にはぜひとも設定された課題をさまざまな角度から検討し、アプローチ方法についても、これまで学んできた各種の手法だけでなく、荒削りでも斬新的なアプローチを打ち出し、よりよい解決策を提示していただきたい。